

巻 頭 言

新型コロナウイルス感染が流行し始めて早1年余りが経過します。コロナ禍により、学校では休校を余儀なくされ、企業では短縮営業や通勤困難によるリモートワークが始まり、本学においてもオンラインによる授業が開始されました。本センターも、大学の方針に従い、対面による教育相談の中止と再開を繰り返している状態となっており、多くの利用者にご迷惑をおかけしております。この場を借りてお詫び申し上げます。

誰もが、感染拡大防止の視点から提案された「新しい生活様式」に必死に適応しようと努力した1年間だったことでしょう。特に、障害のある子供を支えている教育・医療・心理・福祉・就労支援等の従事者や家族といった「支える側」とっては、先が見通せない中、子供たちの感染防止に全力を尽くし、緊張下での勤務や生活が強いられていることかと存じます。

一方で、こうした苦難から得た学びもあったのではと感じています。例えば、私たちの業務に関係が深いこととして、オンライン会議アプリの便利さを学ぶにつれ、場所に関係なく会議や授業、教育相談等ができることを学びました。ただし、もちろんオンライン業務は完璧ではなく、人と人のつながりが必要なこと、直接つながらなくてもオンラインで顔を合わせてできること、顔を合わせずともメール等で済むこと、などのトリアージができるようになったのではないのでしょうか。こうした不安定な情勢だからこそ、テクノロジーの重要性と共に、人と人のつながりの価値への認識が高まったのではないかと思います。一方で、成熟した社会を構築するには、こうした困難な状況下にあっても、我々はインクルーシブに相互扶助できる心の余裕を持たねばなりません。今後ワクチン接種が広く実施されることで、ひょっとしたらコロナ禍は下火になるかもしれませんが、いかなる災禍にあっても、果たして私たちは理性を失わず、思いやりを他者に示すことができるのかが試されているような気がいたします。

さて、特別支援教育実践センター研究紀要は、今回で発刊から19号目となりました。これもひとえに、皆様のお力添えのおかげと、深く感謝しております。本号では、原著5編、実践研究6編、資料3編の計14編が採択されました。複数の知的特別支援学校から、それぞれの学校における生活単元学習や防災教育、地域貢献活動の取り組みに関する報告があったり、タブレット端末を活用した実践研究、本センター及び特別支援教育学講座が取り組んでいる事業内容に関する研究、教科教育や職業教育に関する実践研究など、多岐にわたる研究成果が掲載されています。特にコロナ禍において、当センターにおける対面の相談が困難になっている中、オンラインによる教育相談の実践報告も掲載されております。是非ご一読いただければ幸いです。

最後になりましたが、今後も、本センターへの更なるご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年3月吉日

広島大学大学院人間社会科学研究所附属
特別支援教育実践センター長

川 合 紀 宗